

内科レジデントマニュアル 第7版

聖路加国際病院内科レジデント 編

＜書評者＞ 徳田安春（筑波大学附属病院水戸地域医療センター教授/
水戸協同病院総合診療科）

内科レジデントマニュアルが第7版として3年ぶりに改訂された。昭和59年に初版が世に出て以来、長期にわたり好評を得ている内科マニュアルである。初版時には聖路加国際病院内科レジデント医師によって執筆陣が構成されたが、今回の最新版の大幅な改訂でも多くの先生方が執筆作業に継続して参画されている。そのためか、初版以来続いているよい特徴は維持されており、白衣のポケットに収まるコンパクトサイズで読みやすく、主として内科領域のコモンな症候や病態、疾患が扱われている。改訂が行われたことによって、日進月歩の内科領域の最新治療についてフォローできる内容となった。

改訂版を通読してみて、新たに評価できる点がいくつかあることに気づいた。まず、多くの治療項目では治療内容における個々のレジメンについて、妥当性のレベルが明示されている。エビデンスに基づくガイドラインなどでのコンセンサスがどの程度得られているかどうかひと目でわかるように★印の数でマークされており、

EBMを重視したプラクティスが適切な診療とみなされる今日、治療内容の選択のガイダンスとして大いに役に立つと思われる。

研修医が日常臨床で迷う場面として、専門科スタッフへのコンサルトのタイミングや、医療安全を配慮したリスク（セーフティー）・マネージメントの具体的実践法が挙げられる。このマニュアルでは、これらの点の重要ポイントとして、「専門診療科紹介のタイミング」と「リスクマネージメントのポイント」として、各項目でわかりやすくまとめられているのがよい。また、臨床現場での使いやすさが大幅にアップしており、充実した和文・欧文索引に加え、臨床現場でよく使用される計算式や主要な薬剤の薬力学的動態、注射薬の配合例などの情報もしっかり整理されている。さらには、医学書院ホームページ上に特設サイトが設置されており、新たに追加すべき臨床情報などが随時掲載されていくというサービスまで付いている。

基本的な読者層としては内科系研修医が想定されているが、スタッフ医師や一般医家の先生方の利用

にも十分耐え得る高度な内容が盛り込まれている。重要な治療内容は具体的な用法とともに、図表で強調されて記載されており、臨床現場での処方直ちに実行される形で、コモンディーズに対しての標準的な治療法を学ぶことができるよう工夫されている。一方で、よく使用される診断基準や診断・治療のアルゴリズムなどの図表が豊富であり、死亡診断書の記載法など、初学者のための便宜も図られている。あえて欲を言えば、エビデンスとしての根拠を示す参考文献として、重要な原著論文や英文総説も含めてほしかったぐらいであろうか。

今回の改訂では、堀之内秀仁氏（2006年チーフレジデント）が責任編集者としての大役に抜擢されている。これだけの充実したコンテンツで、使い勝手にも十分配慮したマニュアルが完成したことに、内科レジデントマニュアルが新しい世代への引継ぎ作業を成功させたことを読み取ることができた。研修医のみならず、内科系疾患を診療する臨床家に広くお薦めしたい。

●B6変型 頁512 2009年
定価3,570円
（本体3,400円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00812-9]
医学書院刊